

言語は社会集団と密接に繋がり、別の社会に対する偏見も生む

私が日本と中国の比較研究を始めたきっかけは、1987年に日本に留学して以来、日本のさまざまな社会制度や文化を学ぶことで日本社会の理解が深まったことと、中国から長時間離れたことで、中国的なものに対して距離を置いて見ることができるようになったことが大きいと思います。

そのうち、日本も中国も近代社会を成立させている大きな力が4つあることに気が付きました。すなわち、祖国感情、伝統文化、言語感情、最高権威です。これを社会凝集力と捉えました。そして、この中でも、日本と中国の言語感情に、共通する多くの点を見出せると気付いたのです。

まず、言語が社会凝集力、すなわち社会をまとめる力という点において非常に重要であるのは、言語は社会集団と密接に繋がっているからです。

例えば、私は中国の広東省の客家（はっか）出身です。客家は漢民族の一

支流ですが、長安（いまの西安）あたりから広東省などに移住してきたので、客に家と書いて、客家と呼ばれるようになりしました。

客家には客家語があり、それは現代中国の共通語になっている北京語とはまったく違うものです。私は地元でずっと客家語を話していましたが、北京に行き、客家語を話すと馬鹿にされました。北京語も正確には話せず、訛りがあると笑われました。

逆に、私は客家語が美しいと思いい、北京語を喋っている人たちは気取っているように思えて、彼らの言葉には本心がないように感じていました。つまり、私は客家語によって客家の社会集団に属していて、北京語を話す社会集団には違和感をもっていたのです。

そんな私が日本に留学し、日本語にふれたとき、最初は漢字だけでなく、ひらがなやカタカナがあることに、やはり違和感もちました。

それでも、一生懸命日本語を学び、読むことも書くこともできるようになってくると、漢字とひらがなやカタ

News & Opinion

社会凝集力は偏見も生む。自分をもっと自由に解放してみよう!!

言語は、社会そのものです。その国の言語を研究すると、その国の社会が見えてきます。では、日本語によって見える日本社会とはどのようなものなのでしょう。それは、同じ漢字を使う中国と、どこが異なり、どこが同じなのでしょう。



日本も中国も同じように歩んだ言語感情の歴史

さらに、言語はナショナルリズムの問題とも関わってきます。それは、他国との差別化において、言語がその象徴のように捉えられるからです。

すると、他国の言語との比較において、ときには、自分たちの言語が劣っているという感情や、国家戦略上の打算が働くこともあり、言語に対して複雑な愛憎が生まれます。それは歴史を見ると、日本語を廃止



鍾家新 Jia-xin Zhong

明治大学 政治経済学部 教授
【研究分野】社会学・福祉社会学・日中比較社会学・歴史社会学
【研究テーマ】日本型福祉国家の形成過程、社会凝集力の日中比較社会学
【主な著書・論文】
『在日華僑華人の現代社会学—越境者たちのライフ・ヒストリー』（ミネルヴァ書房・2017年）
『社会凝集力の日中比較社会学—祖国・伝統・言語・権威』（ミネルヴァ書房・2016年）
『中国民衆の欲望のゆくえ—消費の動態と家族の変動』（新曜社・1999年）
『日本型福祉国家の形成と「十五年戦争」』（ミネルヴァ書房・1998年）



北京語が必要だからです。また、個性が表出されにくい近代社会では、ふと自分とはなんなのか、自分はどういう存在なのか見えなくなり、無力感や無意味感にとらわれることがあります。その時、身近ななにかに繋がることによって、安らぎや癒やしが得られることがあります。

私が日本語を真剣に学び、漢字とひらがなを組み合わせることで、きれいでやわらかい、水のように流れる雰囲気のある文章ができることを知ったときの感動は大きかったです。それは、自分自身の可能性を広げることでもありました。生きるために北京語を学び、中国社会と繋がりを、日本文化に偏見をもち続けていた自分であれば、決して得られなかったことだからです。

社会凝集力とは、国家が個人に働きかける力というだけではありません。個人が自らその力と繋がろうとすることも含まれます。例えば、北京語を共通語としたのは国の戦略ですが、当初、地方の、特に老人たちは北京語に馴染もうとはしませんでした。しかし、北京語ができた方が良い仕事に就ける社会になると、若い人たちは自主的に北京語を学ぶようになっていきます。生きるために北京語が必要だからです。

統文化であったり、祖国感情であることもあります。そうした社会凝集力と繋がると、優越感を感じることもできるのです。しかし、そうやって安易に社会と繋がることが、本当の自分の存在を取り戻すことになるわけではないと思います。時には、そこから距離を置いて見ることの方が必要です。

距離を置いて見るとは、自分たちの社会だけでなく、さまざまな社会を知って、自分たちの社会を相対化することです。そのためには、相手に対して尊敬の念をもつことが必要です。すると相手に対して、偏見のない関心が生まれまします。相手を見下しては、相手から本当に学ぶことはできません。最近では、翻訳機や翻訳アプリの性能が向上していて、観光旅行などでも役立つと思います。でも、その国の社会や文化についてちゃんと知ろうと思ったら、その国の言葉をしっかりと学ぶことが必要です。

その案はギリギリのところでは止められ、新たな日本の共通語をつくることとなりました。日本の共通語をつくることで、国民国家の体制を築こうとしたのです。ところが日清戦争で日本が勝ったことで、負けた中国の漢字をベースとして発展した日本語に対して、当時のエリート層は自尊心が許さず、やはり、日本語を廃止することを考えました。第1次世界大戦前後には、劣等感よりも日本の世界進出を前提として日本語の廃止の議論が起きました。漢字を使った特殊な言語である日本語では、

驚くことに同じことが中国でも起きていたのです。1920年代、劣等感から漢字を廃止する議論が起きました。実は、エリートたちが抱えていた日本語に対する劣等感は、一般民衆にはまったく無縁のものでした。むしろ、他国を知らないほど、自分たちのものが一番素晴らしいと思っている面があります。エリートたちは、今度はその感情を利用していいわけです。

このように、言語に対する感情は社会の凝集力であるとともに、ナショナリズムの象徴として表れます。ときとして言語は、劣等感の対象となりましたが、同じような歴史の流れを、日本も中国も歩んでいるのです。

相手に対して尊敬の念をもって学ぶことで、自分の世界を広げることができる

する動きとして現れることもあります。例えば明治初期、日清戦争後、第1次世界大戦前後、第2次世界大戦後です。明治初期、新政府のエリートたちは、日本のさまざまな文化が欧米に劣っていると考え、欧米化を進めました。和服を洋服に着替えたように、日本語も廃止して英語を導入しようと考えたのです。つまり、明治期の頃は、エリート層ほど、日本語に対して劣等意識をもっていたということです。

植民地での統治が大変と考えたので、それが一変するのが、第2次世界大戦後です。今度は敗戦によって鼻を折られ、意気消沈して日本語の廃止を考えるのです。この状況がまた反転するのは、1960年代以降の高度経済成長です。日本社会は自信を取り戻し、以後、日本語を廃止する議論は起きなくなりました。むしろ、1990年代にバブルが崩壊し、高度経済成長が止まると、今度は、日本人としての自信を取り戻すために、日本語は美しいと言うようになりまします。

ですが、1949年に中華人民共和国が成立し、経済が成長し始めると廃止の議論は抑えられます。しかし、旧来の漢字を簡略化した簡体字が作られるようになりまします。日本でもご存じの人は多いと思いますが、簡体字は旧来の漢字に比べると、ただの記号のような形です。例えば、毛筆で漢字を書いても座りが悪く、私にはきれいとは思いませんでした。そのうち1990年代になり、急速な経済成長により完全に自信をもった中国社会は、中国語の漢字は美しいと言うようになり、旧来の漢字である繁体字を見直す動きが出てきているのです。